

【一般演題1】 第3席 「『経穴機要』『医学詳解』『灸炳要覧』の選穴からみた饗庭・味岡流灸法の展開」

京都 北江瀧也

近年の膨大な鍼灸書の発掘により、これまで不明瞭であった江戸期の鍼灸の実像が順次明らかにされつつある。その過程で、饗庭東庵を筆頭とする学統が経穴学と灸法に関して多大な功績を残したことが浮き彫りとなってきた。東庵の高弟に味岡三伯があり、その門下には味岡四傑と称される岡本一抱、井原道閑、浅井周伯、小川朔庵があり、さらに朔庵門人の堀元厚は江戸中期最大の経穴学研究家の一人であり、堀流を形成するにいたった。堀元厚の著した『灸炳要覧』は江戸期最良の灸法書の一つで、当時より定評があった。この『灸炳要覧』は、実は浅井周伯の『経穴機要』（『灸法要穴』）に準じて増補されたものである。そして元厚の師、小川朔庵は『医学詳解』という『経穴機要』（漢文）の和文の講義録を校訂しており、この『医学詳解』の成立には、味岡三伯も関係している。

今回は、上記三書を主に選穴の立場から検討し、饗庭・味岡流から堀流にいたる学統内部の灸法の展開を論ずる。